

今、知らなければならぬこと

終戦を迎えて今年で73年。かつての戦争では、たくさんの方が傷付き、命を失っていきまされた。その時に体や心に負った傷で、いまだに苦しんでいる人もいます。そして、家族を亡くした遺族の悔しさ、悲しさも決して消えることはありません。今回は実際に兵隊として戦地に赴いた人の話を聞き、命の尊さ・平和の大切さについて考えてみましょう。



弱冠15歳で入隊

前 田雪雄さんは、口和町で、前田家の末っ子、12番目の子どもとして生を受けました。そして、国民学校高等科を卒業し、15歳になった昭和17年8月、愛知県にある「河和海軍航空隊」に志願して入隊しました。きっかけは、当時役場が募集していた「満蒙開拓青少年義勇軍」に「国のためになるのなら」との思いから、親に内緒で応募したことだそうです。その後、この義勇軍に志願したことが父の知るところとなり、父に「体が弱いのに寒いところへ行つて命を落とさなくてもいい」と反対されました。この義勇軍は、当時の満州国に開拓民として青少年を送り込む制度で、満州国へ渡っても、寒さや飢えなど過酷な環境での生活が待っていた

ようです。しかしながら、雪雄さんの「国のため」という強い思いに、父は、義勇軍ではなく兵隊に志願することにしたそう。8月13日、口和町を出発し、三次から汽車に乗って広島まで出たとき、警戒警報が発令されたため、そこで一泊。翌14日には「河和海軍航空隊」のある愛知県に到着し、15日に入隊式が執り行われました。770人の入隊者がいたそう。

訓練も命懸け

入 隊してから2カ月間の新兵教育を受けた後、770人のうちの70人が試験に合格し、普通科で教育を受けました。4カ月間の教育でしたが、最初の2カ月間は「海軍精神注入棒」というバットのようなもので

毎晩たたかれたそうです。雪雄さんは、その後さらに試験を突破して、三重県にあった「鈴鹿海軍航空隊」に入隊しました。ここはいわゆるパイロットの養成機関であり、関西方面から入隊した7人がグループとなり、4カ月の教育を受けました。この教育期間中にも悲しい出来事が起こります。ある日パラシュート訓練を受けているときでした。その訓練は、150〜200メートルくらいの高さがあがる支柱の頂上から、パラシュートを付けて飛び降りるというものでした。パラシュートが最初から開いた状態で飛び降りるので、パラシュートが開かず落下するということはありませんでした。訓練場は太平洋からの強い風が吹く場所でした。7人のうちの1人が飛び降りたときでした。パラシュートが強い風にあおられ、運悪くその隊員は支柱に激突し、命を落としてしまったそうです。

また、飛行訓練でも過酷な訓練が待ち受けていました。三重県から北海道に場所を移して行われた訓練は、左右は電柱と電柱の間、上下は電線と地面の間を飛行機でくぐるというものでした。雪雄さんは、「北海道の電柱は高い」と言いますが、少しでも操縦を誤ると地面に落下したり、電線や電柱に当たったりし、たちまち命を失ってしまいます。戦地では命の危険が常ですが、戦地でなくとも訓練を行うのも命懸けでした。ある日、雪雄さんを含む、同じグ



前田 雪雄 さん
昭和2年8月5日生まれ
(91歳 口和町)

落としました。敵から放たれた20ミリの機関銃の弾が頭の上の部分からあごに貫きました。そして血が水鉄砲のように噴き出し、見る間に顔色が青くなっていたそう。すると飛行長が、「水葬」と言いました。そのとき雪雄さんは「ああ、死んだ」と思ったそうです。それから副操縦士が身に付けていた、寄せ書きされた鉢巻きと、お守りの「千人針」を外した後、遺体を海へ葬ったそうです。

ですが、戦争が終わり、自宅に帰ってきたときに家族が喜んでくれたことはうれしかったそうです。ただ、「うれしいときには死んだ人のことが目に浮かぶ」と複雑な思いも話してくださいました。

ループの6人は、「今から南方へ派遣する」と言われ、いよいよ戦地へ赴くことになりました。南方とは現在のシンガポールのことでした。

一発で奪われる人の命

当 時、日本軍は、シンガポールへ本隊を置いていたそうです。戦地へ赴くと、雪雄さんは海軍の大型の陸上攻撃機「一式陸上攻撃機」の操縦長を任せられました。「一式陸上攻撃機」は、飛行機を統括する飛行長1人と、操縦士が2人（操縦長、副操縦士）、機内から機関銃で攻撃する兵隊が2人の合計5人で乗り組みます。副操縦士は、年齢は2つ上でしたが、頭がよく、母親思いのやさしい人で、友達になったそうです。

そして戦闘の日を迎えます。1回目の戦闘は敵の陣地にある飛行場を攻撃するというものでした。その戦闘で、一緒に乗っていた副操縦士が命を



当時の前田雪雄さん

終 戦が近づいていた昭和20年8月13日、いよいよ雪雄さんに「特攻教育を受けるため内地（日本のこと）に戻れ」との特攻隊命令が下りました。そして日本へ帰還途中の台湾で、8月15日の終戦を迎えました。雪雄さんは、当時を振り返りこう言います。「戦時中は『行きます』と言っても『帰ってきます』とは言えなかった」と。そして、「当時自分が死ぬことは恐ろしくなかった」とも。

平成30年度 庄原市戦没者追悼式並びに平和祈念式典

本市の戦没者に哀悼の意を表すとともに、再び戦争の惨禍を繰り返すことのないよう、恒久平和を祈念するため、庄原市戦没者追悼式並びに平和祈念式典を開催します。

多くの皆さんの参加をお願いします。(申し込みは不要です。)

とき 8月22日(水) 10時～

ところ 庄原市民会館

※当日は要約筆記による案内に加え、イントラネットでの中継も行いますので、各学校、各自治振興センターなどでもご覧になれます。

※各支所から送迎バスを運行します。利用希望の方は8月14日(火)までに各支所に申し込んでください。(定員に限りがありますので、ご希望に添えない場合はご了承ください。)

問い合わせ
社会福祉課障害者福祉係 ☎0824-73-1210
各支所地域振興室・東城支所市民生活室

※8月28日(火)～9月2日(日)に、庄原市役所市民ホールで、恒久平和を祈念して、折鶴や戦時中の資料などを展示します。市役所へお越しの際はぜひご覧ください。

